

真田幸村と影武者

——近世期の実録と浄瑠璃を中心に——

長谷川 泰 志*

1. 「幸村」の始まり

戦国武将「真田信繁」はもちろん実在の人物であるが、一方、「真田幸村」は文芸作品中の主人公である。徳川幕府の出版統制令¹⁾のもとでは、板本で大坂陣の概要や実名を記すことは難しい。「幸村」の文芸化を担うのは、写本で流布する実録体小説や、別時代に仮託した浄瑠璃、歌舞伎の演劇作品ということになる。

「幸村」の初出は、1672（寛文12）年序跋の『難波戦記』である²⁾。同書は大坂陣を徳川側の視点で描いて写本で広く伝わった実録であるが、以降、近世を通じて「幸村」の名のもとに様々な物語が付加されていくことになる。一方、歴史学の分野では、確実な文書で「幸村」の諱を確認することはできず、「真田左衛門佐の諱は幸村ではなく、生涯を通じて信繁であった」³⁾とされている。

それでも、信州松代藩が作成した伝記『真武内伝』（1731〔享保16〕年序）や系図「真田家系譜」（1847〔弘化4〕年成立）、また幕府に提出した系図を掲載した『寛政重修諸家譜』にも「幸村」と記されるなど、近世の中期以降、真田氏内部でも、史実との乖離を厭わず「幸村」の物語を採用した様子が見られる。

では、現代に至るまで没後400年という長きにわたって「幸村」の何が支持され続けてきたのだろうか。幸村物語の大筋を綴って言えば次のようになるだろうか。

関ヶ原の敗戦後、14年に及ぶ紀州九度山での不遇の蟄居生活を耐え、豊臣秀頼の要請に応じて大将格の軍師として大坂城に入る。豊臣恩顧の大名衆が家康を憚って誰一人参陣しない中、幸村は浪人たちを率いて奮戦する。しかし、城内は一枚岩の結束力というにはほど遠く、淀殿や大野治長との意見の衝突に悩まされる。自ら最前線の砦真田丸に身を置き、寡兵ながらも智謀を駆使して家康をあわやのところまで追い詰めるのであるが、想いを果たせず最期は大坂城に散る。（後述のように、実録や浄瑠璃世界では、秀頼も幸村も大坂城では死なず、薩摩に逃れる展開が中心となる。）

聊か乱暴なまとめかもしれないが、こうしてみると幸村像形成の中心を為す活動時期は、わずか一年にも満たないことに改めて気が付く。上田時代の信繁は未だ「幸村」とはなり得ないのである。近世以降の読者の求める幸村英雄伝説は、46年間の生涯の中でも1614（慶長19）年10月から翌1615（元和1）年5月7日の討死までの間、和睦交渉をはさんだ冬夏両度の大坂陣の戦いの中に収斂するのである。そこには当然、敗者への共感が底流にあったであろうし、徳川幕府開幕以来の武士の官僚化や、軍なき平和における軍学流行といった背景も考慮しなければならないだろう⁴⁾。そうした中、「忠臣」、「軍師」、「智謀」という語が幸村に冠せられるイメージの中心を為してきたと考えられる。

では、一年弱の大坂陣の戦いの中で、何が幸村像を形成する要素となったのだろうか。より具体的で広汎な戦術描写や幸村の言動に関する

* 広島経済大学経済学部教授

記述を総合して判断しなければならないと思われるが、本稿では特に、幸村伝説に頻出する「影武者」戦術の描写方法に視点を置いて、幸村像の変容の様子を明らかにしてみたい。影武者の用い方次第で、幸村の人物像はずいぶんと異なる印象を与えているのではないかと考えるからである。

2. 七人真田と影武者

2.1 七人真田

江戸中期から明治大正にかけて「真田幸村」の物語には「七人真田」という表現が散見される。幸村には七人の影武者がいたという意味である。例えば明治44年の立川文庫第五編『智謀真田幸村』には次のように描かれている⁵⁾。

自から神君家康公は天王寺南門まで軍をすゝめて遥か彼方を御覧になると、おなじ扮装にて真田と名のる者が七名といふ者、みな馬上に跨がつて厳然とひかへている、これ所謂有名なる七人真田でございます、高所にあつて大御所公はこれを御覧にあいなつたが、いづれが本当の真田だかさらに相判りません（下線筆者）

七人の影武者がいずれも「幸村」を名乗り、同時に一所に現れて敵陣を混乱に陥れる場面である。敵方は、幸村の智謀戦術に度々苦汁を舐められてきた。それが七人も現れ、いずれが本物か知れない疑心暗鬼を生む。それでも圧倒的な兵力差を覆すことはできず、激闘の末に「七人真田」は全員討死を遂げる。そして、いざ首実検の段になるのだが、家康には「いづれが本当の幸村だか薩張りわからない」始末、その間に本物の幸村は秀頼を連れて薩摩に脱出という展開となる。死してなお敵を惑わせる影武者の本領発揮の場面である。

この立川文庫では、書名の通り、軍師真田幸

村像の「智謀」に焦点を当てているのであるが、「七人真田」はその重要な要素になっている。その後の文芸作品に与えた立川文庫の影響の大きさについては足立巻一に指摘のあるところであり⁶⁾、影武者戦術は「真田十勇士」や猿飛佐助、霧隠才三ら忍者の活躍と相俟って現代にいたるまで幸村伝説の大きな要素の一つとなっている。

では、影武者としての役割は何だろうか。端的に言えば、それは死ぬことだったろう。「幸村」の名はその智謀ゆえに戦場では絶大な効果を発揮する。幸村有るうちは敵はうかつな動きはできない。その躊躇いを利用して戦場各所に出没して戦い、そして代わりに死ぬことが影武者の役割となる。その役割に関して影武者たちの心中や、死を指示する幸村当人の言葉は特に強調されることはない。敵方に疑念と逡巡をもたらし、判断を過たせることが影武者戦術の主目的だったからだ。それが立川文庫の描く幸村の「智謀」であった。

ところが、この「七人真田」は立川文庫の発明ではなく近世以来の継承なのであるが、その描写方法は近世を通じて必ずしも一様であったとは言えないようなのである。例えば近世後期から幕末期に近い頃の成立とみなされる実録『真田三代記』には次のようにある⁷⁾。

一説に曰く、真田父子は影武者を多く遣ひ其身は無事を量りて、表向を忠に似せて居る事不審と有ども夫大功は細瑾を顧みみず、大禮は小讓を辞せず。忠を思ふ心の切なるより些少の嫌疑を顧みざる事幸村にしてこそ心に恥る事なからん。英雄の心豈尋常を以て論ずるはげんや。（第五編第廿五「増田毒気の鉄砲を以て夜討の事 并増田影武者と為て自害の事」）

これは本文に続く注釈部分であるが、一説に

よると、幸村と大助の真田父子は多くの影武者を遣って自身の安全ばかりを考え、表向きだけ秀頼に対する忠を装うのは不審だというのである。これは幸村の影武者戦術に対する批判と読める。影武者の死は秀頼に対する忠に繋がるものではなく、幸村自身の命惜しさの保身のためだとするからだ。たしかに、何人もの影武者を死なせておいて自分は薩摩に逃れる、そう考えると忠の大義のもとに死んでいった影武者たちの命の扱いは急に空しいものとなり、使い捨ての「身代わり死」の役割しか果たせないのではないか、という批判になってしまいそうだ。いわば捨て駒の印象が強くなってしまう。そこに『真田三代記』の「一説」は疑問を呈している。

しかしながら、そういう批判があることを一旦は紹介しながらも、それに続く部分では、劉邦と項羽の鴻門の会の故事を引いて、影武者の死は大事の前の小事に過ぎず、まったく恥じる必要もない、英雄たる人物の行動を世の常識で論じるべきではないと再反論しているのである。

ここで「一説」とあるのが何の書を指しているのか不明であるし、また、何の書に向けた批判であるのかも書かれていない。それでも幸村の影武者戦術に対しては、智謀とする称賛と、保身とする批判の、相反する二様の受け止め方があったことを想定してよさそうである。

では『真田三代記』の影武者描写はそうした批判に対する工夫を、本文中に何か施しているのだろうか。その際、先行実録『厭蝕太平楽記』との違いはあるのだろうか。中村幸彦は、『真田三代記』第四編と第五編の大坂陣の部分が『厭蝕太平楽記』系統の書を利用していることを早くに指摘している⁸⁾。その利用のしかたが筋や材に限られるのか、それとも人物造型に関係する描写方法にまで及ぶのか確認する必要がある。そして、『厭蝕太平楽記』に関しては高橋圭一の一連の研究が備わる⁹⁾。そこでは『難波戦記』利用の実態や『本朝盛衰記』への増補

関係といった大きな流れとともに、『元和老花軍記』『慶元記参考』に幸村の影武者が登場することも指摘されている。そして軍学者や講釈師たちによって「豊臣家に忠義を尽くす軍師幸村像」が創造されていった過程も詳述されている¹⁰⁾。また、藤沢毅は『厭蝕太平楽記』で幸村の死が何度にもわたって画策されていることから、作品としての構成意識に論及している¹¹⁾。『厭蝕太平楽記』に関するこうした先行研究を承けて、『真田三代記』の「一説」に言うほどの差異が両書にあるのか否か、検討してみたい。

また、この部分が『真田三代記』本文から二字ほど下げて書かれる注釈部分の一部である点も考慮しなければならない。藤沢の指摘にあるように、いわゆる「評注」と呼ばれる部分は『真田三代記』作者の発言ではなく、後に別人によって付加された可能性があるからである¹²⁾。

さらに、実録以外の分野、特に浄瑠璃作品において大坂陣は大きな題材源となっており、1719(享保4)年初演の『義経新高館』以来、1735(享保20)年初演『南蛮鉄後藤目貫』、1769(明和6)年初演『近江源氏先陣館』、その続編として翌1770(明和7)年『太平頭鑿飾』、その改作異本群の『花飾三代記』、『鎌倉三代記』、1794(寛政6)年『日本賢女鑑』が、鎌倉北条、足利期に仮託して大坂城の落城劇を取り扱っている。

中でも、『近江源氏先陣館』『太平頭鑿飾』の両作が実録『厭蝕太平楽記』を大きな取材源としていることが、近年、久堀裕朗に指摘されている¹³⁾。となれば、浄瑠璃両作品において影武者に関する描写方法や幸村像の造型のしかたも『厭蝕太平楽記』のそれと重なり合うのだろうか。このことも確認してみる必要があるだろう。

以上のような見通しのもと、『真田三代記』の「一説」を手掛かりに、実録と浄瑠璃作品を中心に影武者戦術の描かれ方を検討していきたい。それは戦術描写方法の違いにとどまらず、幸村像の変容にかかわる問題をはらんでいると

思われるからである。

2.2 幸村と影武者の結びつき

そもそも、幸村と影武者はどのように結びついたのであろうか。戦国武将と影武者の逸話は家康、信玄等多いが、幸村の場合は平将門の七人将門伝説と重ねられている。『近江源氏先陣館』第八段「盛綱陣屋」には、「さりながらこの佐々木。古への将門に習ひ。一人ならず二人三人の影武者あつて。何れをこれと見分けがたし。」(下線筆者)とある¹⁴⁾。「佐々木」は真田幸村に模した四郎高綱であるが、『近江源氏先陣館』が幸村の影武者戦術の趣向そのものを作劇の柱に据えていることは後述する。将門に七人の影武者があったことは、古活字版『平治物語』に「将門容貌あひ似たる兵七人伴て、更に主従の儀なき間、すべてわきまへがたかりしに」(下線筆者)とみえ¹⁵⁾、新米を食べるときに本物はこめかみが動くという特徴を藤原秀郷に見破られ討ち取られる。さらに御伽草子『倭藤太物語』¹⁶⁾になると、七人将門伝説は「殿は世の常に超え、御かたちは一人なれども、御影の六体まします故に、人目には七人に見え給ふなり」と幻術めいてくる。「日に向ふ、灯火に向ふ時、御影うつり給ふ。六体には影なし。」と本体のみに影があることを知った秀郷が、鉄の身体の特長を唯一の弱点こめかみを射抜くと、「残る六人のかたちも電光石火のごとくにて、光と共に失せにけり」とあるように、近世期の「七人真田」は鎌倉室町期に出た「七人将門」の伝承を効かせている。そして七人将門の影武者たちの役割は、命をねらう敵の目を欺き、本体に生じる危険を肩代わりして、自分は命を失っても本体を守ることであった。

近世に入ると『慶元記参考』には、次のようにある¹⁷⁾。

真田ハ元ヨリ小勢ナレトモ士卒迄皆死ヲ

極メタル者共ナレバ、些トモヒルマズ、前ニ在カトスレバ忽然トシテ後ヘニ有リ。聚合離散ノ形勢ハ龍ノ雲ニ翻リ虎ノ風ニ嘯ガ如シ。敵モ真田ヲ目懸テ進ミケレトモ、武具馬具一様に鎧ヒタル武者四人アリケレバ何レヲ実ノ幸村トモ知レサレハ閻果テゾ戦ヒケル。

(卷二十九「越前勢與真田戦事」 下線、句読点筆者)

影武者が、ただ本体に近侍して危険を肩代わりする役割から、積極的に戦闘に参加し、戦場を混乱させる戦術として描写されるようになる。同箇所「評曰」には、「影武者ヲ討ハ耻也」との敵方の意識を突いた戦術であったとの注釈がついている。また、この部分は『難波戦記』の「真田幸村は、味方の敗北にも気を屈せず、……(中略)……彼処に顕はれ此処に隠れ、火を散して戦ひけり、聚散離合の形勢、須臾に変化して、前にあるかとするれば、忽焉後にあり、敵は大勢なりと雖も、在所を定めざれば、選み討ちに討つべき様もなく、手に餘りて見えけり」¹⁸⁾を利用していることは表現の類似から明らかであるが、『難波戦記』に影武者が登場するわけではない。ここかと思えばあちらと、居場所を察知させない幸村の神出鬼没の戦い描写がまず『難波戦記』にあり、それを『慶元記参考』が影武者戦術に発展させたことをうかがわせる箇所である。

ここまでは、影武者のいわば機能面に着目した戦術描写であるが、近世中期、『厭蝕太平楽記』に至ると、その戦術を駆使する幸村や影武者の内面にかかわる描写がみられるようになり、人物像として精彩を放ち始めるのである。さらにそれが『真田三代記』になると、また別の幸村像を見せる。両書を比較するにあたって、次章まず、『真田三代記』の影武者描写の方法から考察していく。

3. 『真田三代記』の影武者描写の方法

『真田三代記』では、幸村の智謀を示す奇想天外な戦術がふんだんに用意されている。よく知られたものを挙げてみると、まず幸村は、天文、地理、気象に精通した戦術を得意とする。例えば「風」を読む。敵方の銃撃は全く当たらないのに、風向きを正確に読んだ城方の射撃は大勝利をもたらすのである。そしてさらに霧の発生を予測する。視界不良に陥った敵を足場の悪い深田に誘い込んで殲滅する戦術、また、各地に勢を潜ませ敵を待ち伏せて襲う伏勢戦術、茶白山の家康本陣を急襲する抜け穴戦術、容易に侵入を許さない真田丸の千鳥堀、九度山蟄居時代に考案した黒煙で視界を奪う紙製銃、激しい毒臭を発する散弾を仕込んだ銅蓮火炮、戦場を火の海に変える地雷火、さらには言葉も重要な武器であり、挑発による釣り出しは幸村の常套戦術だった。それらの多くは『厭蝕太平楽記』に既出のものだが、『真田三代記』では一層精度を上げて智謀幸村像を形成している。その中で「七人真田」と呼ばれた影武者戦術は、いささか趣を異にする。類型表現を取り混ぜながらも心理描写が意識して施され、展開は意図して構成的である。そして『真田三代記』の幸村はよく泣く。もちろん影武者のために涙するのだが、幸村と影武者と、両者に交錯する心情に踏み込んで描写し、濃密な関係性を作っていく。その一つ一つが単発に終わらず、伏線となって連関し合い、終盤に一点に繋がっていく構成となる。影武者戦術そのものが物語展開の主軸をなしているかのごとくである。それは、第四編第廿六「真田幸村遠計の事 并幸村秘書を忠昌に與ふる事」から第五編全体を通じて、おおよそ次の三段階の展開にまとめられる。

第一段階 冬陣、和睦勅命破りの謀

第二段階 夏陣、七人真田の最期と首実検の謀

第三段階 薩摩脱出の謀

特筆すべきは、すべて一人の影武者穴山小助を中心として構成されている点である。そのことがどういう効果をもたらしているのだろうか。

3.1 冬陣、和睦勅命破りの謀

第一段階は、以下の展開となる。家康は朝廷勅使を仕立てて大坂城方の反論を封じ、和睦計略を有利に進める。大坂城方は真田丸を破却され、外堀をも失うことになる。和睦交渉役の木村重成による家康挑発の謀計もうまくはいかず、幸村は「大に驚き偕も大坂の御運傾く時節到来せしか」と嘆き、「誠に是非もなき」事態になる。

ここで幸村は、一つの謀を工夫する。敵方越前家陣中に親の代に旧知の間柄であった武将原隼人正がいることを知り、これと対面して旧情を交わす場を作るのである。幸村が出てゆけば、敵方は必ずこれを討取ろうとする。そのときこそ「関東方勅命に背き、大坂方の大将を故なく討取しと言ふ言立、我君を補佐して再び籠城の事成るべきなり」という和睦勅命破りの謀である（第五編第七「幸村密計関東を謀る事 并穴山小助危難を通るゝ事」）。その役を影武者穴山小助に命じる。つまりは死んで来い、ということである。

このとき、なぜ穴山小助なのか。他の影武者ではいけないのか。読者の側からすると、穴山であるべき理由がほしいところである。これに対して『真田三代記』は丁寧に伏線を張っていた。この点が本書の影武者描写方法の特徴となっている。これに先立つ和睦成立以前の第四編第廿六「真田幸村遠計の事 并幸村秘書を忠昌に與ふる事」で、すでに幸村は穴山を影武者に仕立て、敵方の松平正三郎忠昌に真田家秘蔵の軍法書を届けさせている。つまりは幸村の面証人として松平正三郎を作っていた。その際、影武者穴山に「此幸村をもよく身知り置れて後

日の合戦に首を討取天晴の高名を顕はし給へ」と言わせる念の入れようだった。その後も伊達政宗との戦いで味方諸将に「我影武者の穴山小助に従って敵に当るべし」と指示し、また、茶臼山に夜討をかけて家康を強襲したときにも、陣頭指揮する武者は「紺糸の鎧に同毛の鹿の前立物打ちたる兜を猪首に着なし、軍配を以て月毛の駒に跨りし左衛門佐幸村が影武者穴山小助安治」であった。関東勢は「是を見てすはや真田よと云程こそあれどろどろと崩立て引立て引退きける」ほどに、影武者穴山は敵方にも読者にも刷り込み済みであった。すべてはこのとき、和睦破りの大役の「遠計」のためである。このように、幸村として死ぬことの資格が、すでに穴山に付与されていたのである。従ってこの場面、読者にとっては唐突さや違和感を生じさせない構成となる。そして今、原隼人と「四方山の物語り為しける」幸村を松平庄三郎が物陰から透かし見て、「相違もなき幸村なり」と判断し、「穴山が今の命は風前の燈火」の状態となるのであった。

『真田三代記』で、さらに特徴をなすのが両者の会話である。死を指示する側と受ける側でどのような会話がなされるべきか。共感、つまりは読者の許す嘘の作り方と言ってよいのかもしれない。そのことが『真田三代記』の幸村像を規定する。

幸村は穴山を呼び密かに言う。「我其方に対して余儀なき所望あり。叶へて呉べきや」（下線筆者）と。すでに何度も幸村を演じてきた影武者は今更と不審に思いながらも答えは決まっている、「何なりとも君より命ぜらるゝ事背き申さんや」と。幸村は「然らば此度汝が一命を乞て秀頼公御為を計らはんと存ずる。この儀にても命に従ふや」（下線筆者）と言う。何事かと思っていた穴山は、「小躍して大に悦び」、「一命は予て君に奉」ってあること、不肖某が一命をもって秀頼公のお役に立てるならばこの上も

なき喜びと、命の提供を事もなげに承知するのである。

繰り返して言うと、影武者の役割は死ぬことである。「否」は有り得るべくもない。望みをかなえてくれるだろうか、とか、死ぬとわかっているても命令に従うか、などと、多言は無用なのかもしれない。それでも『真田三代記』の幸村は、影武者に死を命じるにあたって言葉を尽くし、情に厚い人物として作られているのである。もっと言うなら、影武者の、この命を「速やかに差上奉つらん」との忠言を引き出し、自発的な犠牲死へと導きやすい言葉を発する人物に作られているのである。そのことが同書の幸村像を形成する基本姿勢となっている。家康に見破られてこの謀が未遂に終わった後にも、穴山に対するこうした幸村の態度は一貫して変わらないからである。

その後、敵方の中根隼人を捕縛し、穴山に幸村を名乗らせて詮議にあたらせた後、「一計を案じ」た幸村はこれをわざと解放する。その際幸村は穴山に言う、「我其方に彼を助けさせしも謀計なり。冬陣に松平庄三郎に逢せしに同じなり。然ば不便ながら近日其方が命は幸村申し受んなり」と。再び影武者として死ぬことを命じるつもりであると告げ、それを「不便ながら」と哀惜を込めた言葉で伝える。これに対して穴山は、「兼て覚悟の事ゆゑに一日も早く戦死して名を千歳に留めん」と、逆に奮い立つ構図を作るのである。こうして主従の強い絆を作り、穴山は使い捨てるの駒ではなく、余人を以て代えがたい扱いになっている。「秀頼公の御為」という大義と、死を惜しむ幸村の哀惜表現の二つが揃うとき、影武者穴山は勇躍死地に飛び込んでいけるという図式を、伏線を多用しながら『真田三代記』は意識して作っているのである。

3.2 夏陣、七人真田の最期と首実検の謀

第二の段階に至ると、幸村の影武者戦略は大

大きく転換していく。戦況はもはや大坂城方が勝利する状況にはない。幸村も「秀頼公の御運も甲斐なき事かな」と嘆息せざるを得ない。しかし、それでも家康の命さえ奪えば状況は変わるかもしれない。物語はその方向に読者の興味を誘導していく。その家康の命を狙う役割はもちろん穴山である。今後穴山はその一点のみのために働く特別な存在となり、やがて来るその瞬間を、「肝心の影武者穴山小助が功をなすべき時節」と特筆する。しかし穴山が家康本陣に接近するのは容易ではない。そのためには、家康を嚴重な警護から引き剥がさなければならない。そこで幸村は影武者穴山とは別に、「一計を施し七人の影武者を仕立て」るのである。これが伊藤団衛門以下の七人真田であった。さらにこの七人真田とは別に無宿勘兵衛を呼んで、「其許の忠義は予て人の知る所なれば、此次の戦には必ず必死を盡されよ」とだけ指示する。「必死を盡す」とは何のことなのか。その説明はない。

ここでは、七人真田のねらいも無宿勘兵衛の役目も、具体的に読者に示されることはない。幸村は、ただ「涙を流し、斯人々に戦死せよ、討死せよと勸むる我心の内こそ察し給へ」と重い心中の苦しみを絞り出し、無宿ともども「涙に暮」れるのである。

ここで幸村は、なぜこれほど涙するのだろうか。その表現は、他の個所以上に哀惜の念を込めたものになっている。家臣たちに次々と死を命じること苦悩し、情に厚い人物として作るためだろうか。それもある。しかし、それだけではあるまい。その理由を読者は七人真田の死後に知る仕掛けとなる。

七人真田の最期と、それに続く首実検の場面を見てみよう。七万の大軍となった大御所家康軍が、新將軍秀忠軍と道明寺で合流するために動き出したとき、幸村は「七人の影武者に下知して今こそ出立すべし」と号令する。伊藤団衛

門以下七人の影武者は、七か所から大筒を撃ちかけ、声々に「真田左衛門佐幸村、天運を計り知て落城の前に戦死せんと欲するなり」と幸村を名乗って切り込む。関東方諸将は「不意に真田と呼りたるに驚き如何はんと慌て狼狽」き、七人真田の火花を散らす勇戦が展開される。伊藤はじりじりと秀忠本陣に近づき、「將軍の床机の許に進み来」り、大音声を揚げて、「真田左衛門佐幸村、將軍に見参せん」と突っ込むのであるが、すんでのところ逃げられる。

やがて味方従卒の大半が討死し、もはやこれまでと、影武者七人は一所に集り小高き丘に上がって、大音上で「真田左衛門佐影武者七人、只今腹切て冥途に到るなり。首取て恩賞に預れ」と呼ばわり鎧を脱ぎ切腹して果てる。冒頭既述の立川文庫の一節はこの場面をとったものである。そして、生き残った兵が影武者の屍を火の中に投げ込み、七つの首は「燻ほり焦て面体分り難ければ、首実検にかけられることになった。

証言者は、わざと生きて捕らえられた無宿勘兵衛だった。無宿が「涙を流して」願うのは、「真田の恩」に報いるため、「せめては首を葬」ることだった。無宿の前に七つの首が並べられる。もちろんいずれも偽首である。その中から無宿は、即座に「伊藤の首を抱きて涙を流し替り果たる有様哉」と嘆いてみせる。そして、首の拝領を許されて近くの寺に葬り、自らは腹掻切て果てる。家康は無宿自害の報告を聞いて「誠の幸村に相違なし」と判断し、「一刻も早く城を攻落とせ」と陣触れに及ぶのである。

以上、『真田三代記』の読ませ所の一つである。ここに至り読者は、「人々に戦死せよ討死せよと勸むる我心の内こそ察し給へ」という幸村の涙の理由を知る。幸村考案の七人真田のねらいは、幸村の偽首を作ることだった。偽首を作るために七人真田の死が必要だった。七人の影武者は「我こそは幸村なり」と叫び、幸村に

ふさわしい死を遂げ、幸村の首に成りおすことだった。そして七つの偽首の中から幸村の首を選び偽証し、変わり果てたお姿と抱きしめ泣く役目を与えられたのが無宿勤兵衛だった。もちろん偽首と知った上での偽証の演技である。最後に、自らの死を以て幸村の謀を完結させるまでが無宿の役割だった。

なぜこのような手の込んだ謀が必要なのか。家康を堅固な防備から引き出すためには、家康が最も恐れる幸村が死ねばよい。城中にもはや幸村なしと思えば、家康は必ず総攻めに出てくる。その一瞬に生じる緩みをねらって、「幸村」を名乗る最後の影武者穴山が、亡霊さながらの死戦をしかける手はずとなる。このことが、関係者全員必死の七人真田作戦であった。それを想っての幸村の涙ということになる。非情な謀の発案者幸村が、影武者たちの死に対し惜しみなく泣いてみせることが、『真田三代記』の嘘の作り方であった。以上が、第二の段階の『真田三代記』影武者戦術の描写方法である。

3.3 第三段階 薩摩脱出の謀

ところが第三の最終段階にいたると、幸村の影武者戦術はさらに変化を見せる。家康を討つこと以上に、秀頼を大坂城から脱出させることの方が緊急優先の事態となっていた。それほどに戦況は悪化している。

扱も大坂城内に於て幸村謀計に身心を苦め、或ひは影武者、又は火攻め、其外種々の工夫を以て関東勢を悩ますと雖も、天命の帰する所何も述計齟齬し、流石の幸村も今は如何とも為べき様なく薩州へ落とすと為たりけり。

(第五編第廿二「本多忠朝他大勇の事 并大野小三郎が伝」)

脱出先は薩摩である。大筋を『厭蝕太平楽記』

に従うからには、秀頼、幸村の薩摩落ちの結末は外せない。源為朝の琉球渡来伝説、朝比奈義秀の高麗落ち伝説、義経の蝦夷渡り伝説等、英雄は死なないという典型的な展開となる。問題はその理屈の付け方である。薩摩落ちは唐突ではないことを読者に納得させる必要がある。『真田三代記』はどのような工夫をしているのか。作中、島津から薩摩に誘う申し出があることをかなり以前に遡って伏線として用意していた。冬陣後の和陸中の場面である。

島津氏より予て申越候は萬一其地にて難儀ならば薩州へ御越あれ。其節は軍勢を差向御迎の船をも差出し申すべし

(五編第八「幸村秀頼公に将来の事を洩す事 并三女両使駿府下向の事」)

これで薩摩落ちは唐突ではなくなった。では、首実検後の無宿勤兵衛の自害を以て幸村討死を確信させ、家康を油断させて釣り出す手はずはどう変更されるのか。実はこの点、『厭蝕太平楽記』を変更し、御宿の追真の演技と犠牲死を以てしても、家康の疑念は消えてはいなかったことに修正している。関東方では、さしもの幸村も「冥途の鬼と成者哉と陣中挙て評判す」るのであるが、肝心の家康は、「然るに大御所は何とやらん。未だ疑ひましましける」の状態であった。それほどに幸村の影武者戦術に悩まされてきたということだ。そして、松平庄三郎相手に「予、密かに之を疑へ共、今更葬りし首を堀出し汝に見せんも器量の狭きに似たりとて其儘に過させ給ふ」と言う。幸村の面（実は穴山）を知る証言者松平庄三郎が、首実検当時、陣中不在であったことを疑念が晴れない理由として付す。今更首を掘り返して確かめるわけにもいかず、結果、家康は用心を解くことなく最後の大坂城攻めにあたることになる。

これで影武者穴山の最期の使命は、家康殺害

から、秀頼、幸村の薩摩脱出幫助に変更される。行動そのものは何も変わらない。幸村を名乗って戦い、あわよくば家康を討ち、幸村として死ぬだけだ。そして、改めて松平庄三郎を証言者として首実検をやり直し、幸村の最期を家康脳裏に刻んで得心せしめ、この世の人であるはずもない幸村が薩摩に脱出などと疑いようもない状態を作ればよいことになる。薩摩落ち苦心の理由の付け方であった。

穴山の最期は念を入れて作られる。まず幸村本人が徳川方の勇将本多忠朝と一騎打ちを行う。古井戸に落ち込んだ幸村が、覗き込む忠朝めがけて渾身の一撃を放ってこれを討つ、やいなや、素早く穴山と入れ替わり城内に戻る。穴山は忠朝の鎧に着替えて、大音声を張り上げ、「大坂方に鬼神と聞えし誠の真田幸村を本多出雲守忠朝討取たり」と叫び、一散に家康本陣に駆け入る。たちまち不審を抱いた越前勢八百に囲まれ、奮戦するも壮絶な討死を遂げる。討取ったのは、これも以前幸村と会っている原隼人であった。「是去冬初めて対面せし幸村に相違なし」、「今迄は様々の謀計にて影武者を出せしも今日こそは誠の真田必死を極めしとみえたるぞ」と、幸村に一騎打ちを挑んでこれを討ち取り、「真田左衛門佐幸村を原隼人正討取たり」と大音声で叫ぶと、越前勢一同、どっと勝鬨を揚げる。

家康御前の首実検の改め役は松平庄三郎。「去冬対面せし真田に相違之なく候」と言えば、家康も、「涙はらはらと流され忠臣義士も世に多しと雖も、此幸村に優るべき者有ざるなり」と、幸村に代わって敵将家康が賛辞を送り、幸村まことの死と決着する。この間に、本物の幸村は秀頼に「密に抜穴を御通り有て薩州へ御船にて落延有さすへし。某し何処までも御供仕つらん」と言い、脱出に成功する。

任務を完遂して幸村として死ぬことが影武者にとって最高の名誉であろう。影武者の死後に幸村が正体を現した時点で、影武者の効果は失

われ、その死は空しいものになってしまいかねない。影武者の犠牲死は生かさなかったからだ。「七人真田」と呼び、多くの影武者の命を次から次に使って智謀を駆使した印象のある幸村だが、『真田三代記』では特別な存在の影武者穴山小助を中心として構成しているのは、以上の効果を考えたことと思われるのである。

4. 『厭蝕太平楽記』の影武者描写の方法

では、『真田三代記』が大筋の基とした『厭蝕太平楽記』では、影武者戦術はどのように描かれていたのか。『真田三代記』の「一説」が指摘する差異がみられるのかどうか、三段階の順に確認してみよう。

まず、第一の和睦破りの謀の場面。『厭蝕太平楽記』では、作中初登場となる影武者増田兵太夫がその任に指名されている。なぜ増田なのか。「去月、出丸へ同苗隠岐守来る時、其方に出会させたるは身知置たるはかやうの事も又有るべしと思ふ故なり」の一文を付して、理由付けとしている¹⁹⁾。しかし、これ以前に真田隠岐守と影武者増田との対面場面があるわけではない。『真田三代記』の穴山の伏線と、『厭蝕太平楽記』の増田の後付けと、理由付けの方法そのものが異なっているのである。『厭蝕太平楽記』の後付けの理由を伏線に変更していくのが『真田三代記』の方法ということになる。良い悪いの問題ではない。両書の享受のされ方の違いと言ってよいのではあるまいか。以後、『厭蝕太平楽記』では影武者の役割を増田と穴山が二分して担当することになる。

幸村と影武者の間でなされる会話の違いはどうだろうか。『厭蝕太平楽記』では、両者のやりとりははるかに簡潔である。増田が「われ名将の御名をかりて討れん事、武門の誉れ此上もなし」と勇むのは、「便りなふは候へども其方討死せば、此あつかひ破れて君の勅命背き給ふ事也。われわれ、君を助けて又籠城して敵を破

るべし」との幸村の言葉を受けてのこととする。『真田三代記』の幸村のように、「叶へて呉べきや」とか、「この儀にても命に従ふや」と、何度も重ねて問うたり多くの哀惜表現を用いることはない。藤沢の言を借りれば、「味方の勝利のために、自らの生命を軽んじ、むしろ死ぬことを喜びとするのは、『厭蝕太平楽記』の世界では当然のように描かれる」のである²⁰。「当然」であるからには贅言は要しないし、悼む言葉も要らない。この当然であった潔さを、『真田三代記』は修正していることになる。

中根隼人捕縛の場面はどうだろうか。『厭蝕太平楽記』では影武者穴山が初登場となるこの場面で、なぜ穴山なのかの意味付けはない。ただ、幸村の「我、着替の鎧を着し某が真似して助け帰すべし」との指示があるのみである。そしてやはりこの場面でも、中根隼人をわざと解放した幸村の「我奥意を汝知りたるや」という問いと、「御名代の討死、覚悟仕候」との穴山の返答という、簡潔なやりとりだけが記される。そして、「我に替りて討死せよ」、「其方討死せば我と思はせ敵を釣る手便なり」との幸村の命令が下され、当然のこととして穴山は「おどり上りて大に悦」のである。影に死を命じるにあたって「不便ながら」と影武者の犠牲を哀惜するような感情表現を交えることはなく、「敵の無理がかりを破り、今一度、変を見るべし」と、目的意識の強い幸村像が作られていた。

第二の段階、七人真田の最期と首実検の場面はどうか。

『厭蝕太平楽記』では、幸村は無宿勸兵衛を呼んで「内々の事、今日に有り。御自分の忠義、爰なり」と指示する。無宿は「仰せのごとく私所存の願ひなり」と「死を勇む」簡潔な言葉を返す。それに対し幸村は、「涙を流し、此義を勤め給へば古今の忠義御自分にある也」と、泣くのである。『厭蝕太平楽記』では幸村はめったに泣かない。そういう人物に作られている。

それが、言葉はないが、無宿のために涙している。『真田三代記』はこれをさらに拡大発展させて、「人々に戦死せよ討死せよと勤むる我心の内こそ察し給へ」と幸村に発言せしめ、情に厚い幸村像に変更しているのである。

さらに大きな違いは、『厭蝕太平楽記』では、ここで影武者穴山は討死し、以後の展開にはかわからない点である。穴山は七人真田の一人として奮戦討死し、七つの偽首の一つとなる。首実検で無宿の偽証によって選り葬られ、物語から退場するのである。以後の影武者は増田兵太夫が担当することになる。『真田三代記』では、穴山は複数の影武者たちの中でも「肝心の影武者」として作られていた。そして既に見たように、その伏線の張り方は入念であった。

影武者が何度も死に、幸村が何度も蘇るということは、その都度、犠牲死の効果が失われることを意味する。つまり幸村は、影武者たちを無駄死にさせたということになってしまうからである。ましてや自身は薩摩に逃げる結末となれば、「其身は無事を量りて、表向を忠に似せて居る」との批判は起こり得ることである。その結果、目的のためならば影武者たちの命を次々に犠牲にして厭わない『厭蝕太平楽記』の幸村像は、『真田三代記』で修正されていったのではないだろうか。

では、最後に第三の段階、薩摩脱出の謀の段を確認してみよう。

穴山亡き今、敵将本多忠朝を古井戸で討った幸村本人と入れ替わるのは、益田（増田）兵太夫である。入れ替わりにあたって、そのねらいが幸村の口から語られる。今朝、島津が三千の兵を率いて船で入港してきた。家康への加勢とみせかけて「実は某と秀頼公の御迎いなり。今宵出船すべし」と言う。そしてこれから死に行く益田（増田）に対して、その死の意義を「敵に気を付させまじき為に汝を討死さする也」と、自分と秀頼公の薩摩脱出を敵に気づかせな

いためだと言う。そう一旦言っておいて、「汝を討死させて我は生る為にはあらず。皆これ、君の御為也」と、それは己の延命保身のためではなく、秀頼公のためなのだと言い直すのである。さらに、「汝と数年主従と成て今、分るゝ。身を粉に砕くが如くなれ共せん方なしと、涙と共に」言うのである。その発言は聊か言い訳めかないだろうか。先に述べたように、『厭蝕太平楽記』の幸村はあまり泣かないし、影武者を送り出すにあたって多くの言葉を用いない。数年主従の濃密な時間を想起するには具体性に乏しい。しかも、本多に成りすますために、敵の目から隠れながら益田（増田）が本多の鎧に着替える慌ただしい時間でのことだ。要するに取ってつけた感が否めないのである。たしかに薩摩落ちの予告はあった。しかしこの場面、『厭蝕太平楽記』の他の場面でもそうであったように、理由の後付けの手法の印象が強い。『真田三代記』では間髪いれずの入れ替わりであり、穴山の死のねらいが実は薩摩脱出にあったことは、穴山の死後に読者に明らかにされる。これもまた、両書の享受のされ方の違いから生じる差異なのではなかろうか。

以上、『厭蝕太平楽記』で影武者戦術を用いる幸村は、秀頼への忠を尽くし家康を討つという目的のためならば、部下たちを次々に犠牲にすることを厭わない人物に描かれる。

実は、幸村のこうした態度は、影武者以外の人物に対しても見られるのである。

強い目的意識のために、家臣の命の扱いは非情とも映る幸村の姿は、『厭蝕太平楽記』前半部で、関ヶ原敗戦直後に妻を自害に追いやるどころから始まっていた。西軍大谷刑部少輔吉継の娘を妻とした縁もあって、「義心金鉄の真田父子、弱き助んと秀頼公の御味方に属し」て信州上田城で徳川秀忠軍を足止め奮戦するのであるが、敗戦後の九度山蟄居が命じられた際、幸村は妻を次のようになじる。

此度、舅刑部、石田に組しあまつさへ毛利浮田に進め謀書をとつて我々を欺き此仕合せ。幸村こそは舅の縁に引れて謀反人に荷担したりといわれん事無念なりと憤りける。（卷三「幸村蟄居して真田紐を打事 付伊豆守左衛門に対面之事」）

秀頼公のためと思うから味方したのに、石田三成に組した舅大谷刑部に騙され、謀反人となってしまったことは無念と憤るのである。これを直接に言われ責任を痛感する妻は自害して果ててしまう。このことは『難波戦記』にもないし、『真田三代記』も採用していない。もちろん史実の信繁夫妻は九度山で配流生活を共にし、嫡男大助が誕生しているから、秀頼への忠を強調するための虚構とみられる。

やがて京都方広寺鐘銘事件に端を発した徳川と豊臣の交渉が決裂し、双方ともに開戦準備に入っていくのだが、『厭蝕太平楽記』では、家康の命を受けた幸村兄伊豆守信幸が、「信州一国の御墨付」と「子々孫々迄御見捨有まじき」の二通の御書を携えて東軍方への参陣を促しに来る。幸村はこれを「惣身の節々痛み立居も不自由の身にて、士官の事思ひも寄らず」と虚病を拵えて固辞する。一方、大坂方片桐且元の誘いには「太閤様御時代、父安房守一旦御幕下に属したれば、秀頼公の御召とあれば毛頭違背仕るにては是なく候」と、秀頼への一途な忠誠心を強調して、兄の勧誘にも信州一国の見返り条件にも揺るがない。

『難波戦記』では徳川側の交渉役は叔父の真田隠岐守信伊であるのを兄信幸に置き換えている。史実の調略担当は叔父信伊であって、兄信幸は病のため大坂には参陣せず二人の息子を代わりに出陣させているのだが、『厭蝕太平楽記』は、合戦に敵味方に分かれる兄弟の視点を持ち込み、兄に「他人の使者と違ひ兄伊豆守来たりし事なれば我にめんじて士官致すべし」と言わ

せる。これも、兄からの依頼を断って秀頼への忠義を全うしようとする忠臣幸村を際立たせるねらいだろう。これを浄瑠璃『近江源氏先陣館』では兄弟の相克劇にまで発展させているのだが、この点後述する。

さて、幸村調略に失敗した後、幸村が入城したことを知らない家康は、「我恐るる者は真田左衛門也。若、空死して籠城せば中々勝事叶ひ難し」と、幸村の空死、つまりは死んだと思わせて繰り返す智謀戦術を警戒する。これに対し幸村の方も、「大御所にわれ生きてある事知らせまじく為に」行動することが重要であった。つまり、幸村は城中になしと思えば家康は釣り出されて叩かれるし、生きていてのではないか疑えば、逡巡が敗北に直結しかねない。この駆け引きが『厭蝕太平楽記』の幸村の影武者戦術の根幹となっている。以降、家臣が次々に死を命じられていくことになるのは、その戦術に基づいてのことであり、徹底した目的意識がそれを支えている。

もちろん巻七「幸村五か所に伏勢の事」のように、影武者は死ぬことなく、痛快に活躍する場面もある。家康の陣廻りを察知した幸村は、七人真田ならぬ五人の影武者に百余騎ずつ与えて陣廻りの先々に伏して配置する。そして家康が現れると、順に「真田幸村是にあり」と起兵させ、三百人の家康旗本を徐々に分断していき、最終的には家康をただ一騎の「はだか武者」にしてしまう。家康が「震ひ恐れ」、小家の中に逃げ込み、「すのこの下に隠れ給」ふほどに追い込まれる場面は、複数影武者戦術の面目躍如ともいえる。

しかし、死なない影武者はむしろ例外と言える。基調となるのは、次々と死ぬ影武者であり、死を命じる幸村の姿である。この点について藤沢に「幸村の数度にわたっての死というものが巧みに配置され、『厭蝕太平楽記』全体の一つの構成要素になっている」との指摘があり、そ

れを「照対」と呼んで「似ているからこそ読者にその違いを意識させ、読み比べさせる働き」があり、「違いを楽しむのである」としている²¹⁾。その一つは渡部四郎左衛門の場合。命を捨てる者を募る幸村に対して渡部が手を挙げる。死を志願した渡部に与えられた任務は、敵将藤堂高虎寝返りの偽密書を携えてわざと敵方につかまり殺されることだった。この謀にどういうねらいがあり、どのような成果を得たのだろうか。それは、敵陣に寝返りの疑心暗鬼を拡散すること、ではなかった。家康にこの謀を「浅はかなる方便」と思わせ、城方大野のような「智の浅き者の謀」であって、「幸村は弥死たるに極たり」と判断させることが幸村のねらいであった。だからあえて愚策でなければならない。結果、この愚策の代償として渡部は串刺しにされて晒される辱めを受ける。これを見て幸村は、「涙を流し、扱も天晴なる忠臣、君の為に失へり」としながらも、「某が謀誠になれり」と、渡部の辱めの礫は想定通りであると言う。その言葉通り、釣り出された藤堂勢は六七千の兵を失う大損害を被ることになる。これは先に、幸村が淀殿に示した「近日のうちに小敵を討とりて、次に大敵を討取申すべく候。其時、御見物に御出座願ひ奉り候」の、「大敵」を討取って見せる約束事の実行に他ならない。渡部にとっては「御用に立我命」であることが重要であって、「浅ましき死」は問題ではないのだ。『厭蝕太平楽記』の幸村にとっては、まず戦略的目的意識に徹することが最優先事項となる。『真田三代記』ではこれは採用されていない。

以上、他にも様々な事例について論を尽くさねばならないところだが、紙幅の都合、例示はこれに留める。確認したいのは、『厭蝕太平楽記』と『真田三代記』の両書は、大筋は同じながら、特に影武者戦術に着目した場合に、作られる幸村像は決して一様ではないという点である。『厭蝕太平楽記』では、目的のためには妻、

影武者、家臣たちの犠牲死を躊躇しない冷徹とも映る幸村像を見ることができる。『真田三代記』では、言葉を尽くして情に厚い幸村に修正されていく。

再び冒頭に示した『真田三代記』の「一説」に戻ると、当該箇所直前の、同じく「評注」部分に、幸村の嫡男大助の影武者に関する記述がある。増田兵太夫が倅兵蔵を大助の影武者に立てたいと申し出たのに対し、幸村は、「子を思ふは我人共に同じ事なれば、御自分にも爾為れ給ふ事無かしと察しやらるゝに付、先々此事は御止りあれ」と、親として子を思う心情を察し、その申し出を断っている。これに対し増田は、我が子が影武者として採用されなければ父子共々切腹して果てる決意を述べ、長曾我部等も強く勧めるのだが、それでも幸村は「いまだ之を聞入ざるとかや」と、兵蔵を大助の影武者として採用することに強いたためらいを示している。実際には『真田三代記』中の兵蔵は『厭蝕太平楽記』と同じく、大助の薩摩脱出を助けるために影武者として果てるのだが、実は幸村の心中は決して平静でなかったとの解釈を付していることになる。

では、成立時期が両書の間に位置すると考えられる浄瑠璃作品はどのような幸村像を作っていたのだろうか。最後にこの点を確認しておきたい。既に述べたように、『近江源氏先陣館』が『厭蝕太平楽記』を取材源としていることが指摘されているからである。

5. 浄瑠璃の幸村像

久堀裕朗は、四つの要素に基づいて、1769（明和6）年初演『近江源氏先陣館』とその続編の翌1770（明和7）年『太平頭鑑飾』（後の『鎌倉三代記』）の両作が、実録『厭蝕太平楽記』を取材源としていることを指摘している²²⁾。では、その幸村像は『厭蝕太平楽記』とどれほど重なり合うのだろうか。久堀の研究成果を承け

て、浄瑠璃両作品の影武者描写を抽出してみよう²³⁾。

作中、佐々木四郎左衛門（真田幸村）は、「軍法智謀隠れなき」、「佐々木四郎左衛門高綱こそ。今の世の軍帥」という基本設定に始まり、「諸葛が術をなすとても」と、諸葛孔明に匹敵する軍帥であった。戦場での影武者戦術は、「姿も一対二人の佐々木」、「主従かはらぬ三人佐々木」、「そこにも佐々木。こなたにも。佐々木佐々木と名をふらし」と神出鬼没を極め、「これまで佐々木を討ちとりしもたびたびなれどみな影武者の贋佐々木」であり、「さてこそ佐々木は討ち取りしと。安堵の思ひにけふの出陣。またも佐々木に追ひ立てられしは。幾人あるとも計りなき。佐々木が謀の恐ろしや」と時政（家康）を悩ませる。影武者戦術は、戦術であることを越え、浄瑠璃両作における幸村の人物像を形成する上で中心となる要素であった。浄瑠璃作品において、このような戦場を混乱に陥れる影武者描写は、1719（享保4）年初演の『義経新高館』にすでに見えている²⁴⁾。

其上兼て扶持し置く。秋山理助茂木半蔵。顔も姿も某が形か影の如くにて。三人並べば三人の忠平（幸村）有るかと汝でも。見紛ふ程に拵へ置く此両人が討死せば。正真の忠平が立戻って天晴な目覚し軍見すべしと。

主従一体の戦いを繰り広げ、必死の戦いの末に、敵が、「鬼とも呼れたる。和泉の三郎忠平（幸村）を。秋葉藤六鬼清が討取つたり」と勝ち名乗りを上げたかと思えば、「後ろより似せ者掴の藤六殿。忠平堅固で是に有り参りざふ」と、今一人の忠平（幸村）が現れる始末、「切れば切る程跡よりも湧いて」出てくる泉の三郎（幸村）に、「汝等如きあら凡夫討取つたりとは緩怠と。大声上げて嘲られ」、敵方にとっては

もはや悪夢の戦いであった。1700年代の前半には影武者を使った幸村の変幻自在の戦いぶりが定着していたと考えられる。

こうした影武者描写方法は実録『厭蝕太平楽記』に受け継がれ、さらに、その『厭蝕太平楽記』の首実検を、浄瑠璃『近江源氏先陣館』が「盛綱陣屋」の場で作劇の中心に据えているのである。『太平頭整飾』の琉球脱出の結末が『厭蝕太平楽記』の薩摩落ちに対応することは久堀の指摘の通りであり、それ以外に影武者に関係する類似の箇所を挙げると、古井戸の中から安達藤三郎（幸村）が富田六郎を刺す場面は、『厭蝕太平楽記』のそれだろうし、「富田」は「本多」，「安達藤三郎」は木村重成の首を「貰い首」した「安藤長三郎」のもじりだろう。影武者に関係する類似箇所は随所に見られ、また、「火炎の毒気」や「庭の中にも地雷を伏し」とある戦法は、実録で幸村や大助が用いる銅蓮火炮や地雷火を思わせる。

では、『厭蝕太平楽記』を取材源とした浄瑠璃両作の描く幸村像とはいかなるものだったのか。『近江源氏先陣館』の首実検の場を中心に比較してみよう。まず、第七段は、兄盛綱（信幸）が北条時政（家康）の指示を受けて、弟高綱（幸村）を味方に引き入れるために偽りの降参を仕掛けてくる場面である。これに対する弟高綱（幸村）の言葉は激烈を極める。兄を「腰抜けの犬侍」と罵り、誠自分の兄ならば「その腐つた性根を改め。いよいよ敵味方となつて。戦場にて二郎左衛門高綱が。首取つて見せうとおいやれ」と言い放ち、「恥を恥とも思はぬ人畜」、「顔見るのもけがらはしい」、「あかの他人の卑怯者」と畳みかけて罵倒するのである。こうした弟を兄は、「イヤもう弟高綱が義心は鉄石。某も北条殿の御頼み。何卒高綱を鎌倉へ味方させんと。余所ながら心底をさぐり見れども。いかないかな二君に仕へる所存のないこと。しつかり錠がおりました」と時政（家康）に報告

する。これは、兄信幸が「信州一国の御墨付」を持って幸村の寝返りを謀る『厭蝕太平楽記』の場面を下敷きにしているのだが、『厭蝕太平楽記』の兄信幸は以後登場しないのに変わり、『近江源氏先陣館』ではこれをもって兄弟の相克劇の幕開けとする。やがて、初陣となる高綱一子小四郎が戦場で盛綱方に捕らえられ、第八段「盛綱陣屋」の首実検の場が始まる。

「我が子を取られし憤り」の高綱は「死物狂ひ」の戦いをしかける。しかしやがて、高綱討死の報が盛綱のもとに入る。そして、「誠の佐々木かにせ首か。弟が首よも見損じまじ。兄盛綱実検せよ」との時政の命で、高綱の首が盛綱のところへ届く。「父の死顔拝まん」と、小四郎がその首を一目見た瞬間、「と、様さぞ口惜しかる。わしも跡から追ひつくと。氷の刃雪の肌。腹にぐつと突立」て、自害して果てる。それを見た盛綱も「弟佐々木高綱が首。相違御座なく候」と偽りの証言をするのである。

これが「贗首」であることが観客に明かされるのはその直後のことである。つまり、見た瞬間に「贗首」と知った小四郎は、「と、様」と叫んで腹を切ったことになる。そうすることによって、父の「贗首」の謀を完結させようとした。つまり、この影武者の「贗首」を送り込んだ父高綱（幸村）の意図を、一子小四郎が読んで自害したということになる。そうさせることを意図した高綱（幸村）として描かれている。

時政（家康）を討つという目的のためならば、我が子、家臣に対しても非情に徹し切る幸村像がそこにはあった。一方、兄盛綱は、なぜ偽証したのか。本来ならば、正しく「贗首」と証言するはずだった。それは、「父がために命を捨つる幼少の小四郎」を「なんと犬死がさせられう」という甥の悲壮な覚悟を汲んだからだった。そして「不忠として大將（時政）を欺きしは弟への志」と、そうまでする弟高綱の志をかなえてやりたいと思ったからだった。『厭蝕太平

楽記』の御宿勘兵衛の偽証の演技に材を取り、兄弟の正反対の典型像を描く物語に変容させている。

『近江源氏先陣館』『太平頭髻飾』の高綱（幸村）は、影武者のために涙など見せはしない。逆に、面体の似た百姓をも誘拐し、これに「サア鉄砲を打習へ。イヤ馬に乗の。弓引のと」、武士としてのトレーニングを加えて影武者に仕立てるのである。影武者たちの捕らわれ場所は、「幾人ともなふおれは佐々木じゃ。おれも佐々木じゃと。どれがどれやら紛らはしい」とのありさまで、あたかも影武者養成所の趣である。それが影武者の命の扱ひであり、一子小四郎の命も例外ではない。父の贖首は、自害せよとの合図に等しい。最優先されるべきは秀頼への忠であって、高綱（幸村）は、命の価値判断をこの一点のみに置く冷徹な戦略家であった。それに対して兄盛綱は苦悩を抱える人物に作られる。甥の自発的な犠牲死を目の当たりにして、その「餘り神妙健気さに」、忠と情の間で揺れる心の持主に描かれるのであった。目的意識の強さという点では、浄瑠璃両作の幸村は『厭蝕太平楽記』の幸村の延長上にあるように思われる。ただし、数倍強固な意志を持つ幸村像である。その際、情に属する部分は兄盛綱に分離担当させて、二つの対立する人格を造型している。影武者の首実検がその仕分けに使われたわけである。

以上、本稿では、『真田三代記』の影武者に関する「一説」を手掛かりにして、『真田三代記』『厭蝕太平楽記』の実録二作品と、浄瑠璃『近江源氏先陣館』『太平頭髻飾』両作の幸村像を検討してきた。影武者の役割が死ぬことであるからには、影武者を使うことは、戦術として使用するにとどまらず、その命を扱うことに他ならない。そこに人物像の差異が生じてくる。歴史的イメージからすれば、忠臣、軍師、智謀に集約される幸村像も、作品によってずいぶん異なる印象を与えていることを本稿では指摘

してきた。『真田三代記』が『厭蝕太平楽記』を利用したにもかかわらず、両書の幸村像にはかなりの隔たりがあることも確認することができた。それは主に、嘘の理由付けの方法の違いと、会話における哀惜表現の有無に起因していた。そして、『厭蝕太平楽記』と『真田三代記』の間に、対照的な兄弟の人物像を造型してみせた浄瑠璃両作があったことがわかる。近世の幸村像は決して一様ではなく、変容を続けてきたことを確認できるのである。

注

- 1) 江戸時代には何度も出版統制令が出されているが、享保7（1722）年の町触5か条をみると、「人々家筋先祖之事」（第3条）や、「権現様之御儀」、「御当家の御事」（第5条）に触れるものは、「板行書本自今無用可仕候」と、出版だけでなく写本も取り締まり対象だった。
- 2) 『難波戦記』巻八「真田隠岐守を真田左衛門佐方に遣はさるゝ事」から「幸村」の名が記載される。（『通俗日本全史』第11巻68頁）
- 3) 平山優『真田信繁』（角川書店、2015年）25頁。
- 4) 井上泰至は『近世刊行軍書論』（笠間書院、2014年）で、「避けようもない武士の官僚化の潮流を危惧するかたちで、士道を教育しようとして軍書の中から武将の銘々伝を抜粋・編集する動き」を指摘し（41頁）、『江戸文学を選び直す』（笠間書院、2014年）では、「十七世紀末は、武士の官僚化が止めようもない流れとしてあり、現実に武士のモラルや、武士のアイデンティティーが失われかねない危機感から、逆に武士道の書物が生み出された側面がある」と述べている（21頁）。
- 5) 『智謀 真田幸村』（立川文庫第五編、加藤玉秀著、立川熊次郎発行、1911年）282頁。
- 6) 足立巻一『立川文庫の英雄たち』（中央公論社、1987年）に詳しい。
- 7) 帝国文庫第18篇『真田三代記 越後軍記』（博文館、1929年）618頁。以下、『真田三代記』の引用は同書に拠る。
- 8) 中村幸彦『日本古典文学大辞典』第3巻（岩波書店、1984年）の「真田三代記」の項。
- 9) 高橋圭一『大坂城の男たち—近世実録が描く英雄像』（岩波書店、2011年）。影武者については「『元和老花軍記』は幸村に影武者が二人いたとする。『慶元記参考』では五人である。『厭蝕太平楽記』になると九人の影武者が登場する。影武者の創作は『厭蝕太平楽記』ではあるまい。」との指摘がある（31頁）。
- 10) 高橋圭一「幸村見参—大坂の陣の実録と講釈」（岩波書店「文学」、2015年7—8月）に、「豊臣家に忠義を尽くす軍師幸村像を創造したのは、軍

- 学者やその成れの果て、末流たる講釈師たちであったと思われる」との指摘がある。
- 11) 藤沢毅「真田幸村は何度死ぬ—『厭蝕太平楽記』における構成意識」(『鯉城往来』15 広島近世文学研究会, 2012年12月)
 - 12) 藤沢毅「近世中期成立通俗軍書写本群の相互関係—立耳軒作品と『太閤真蹟記』『真田三代記』—」(『鯉城往来』2 広島近世文学研究会, 1999年12月)
 - 13) 久堀裕朗「浄瑠璃『近江源氏先陣館』『近江源氏太平頭整飾』の構想」(岩波書店「文学」, 2015年7-8月)
 - 14) 日本古典全書『近松半二集』(朝日新聞社, 1968年)。以下、『近江源氏先陣館』の引用は同書に拠る。
 - 15) 日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』(岩波書店, 1961年) 447頁。古活字版『平治物語』巻下に見られる。
 - 16) 新潮日本古典集成『御伽草子集』(新潮社, 1980年) 所収『依藤太物語』136-138頁。
 - 17) 『大坂冬夏両陣始末 慶元記全』(北条氏長編, 武蔵吉彰発行, 1981年) 552頁。
 - 18) 『難波戦記』巻第21「忠直卿合戦 附真田討死の事」。引用は『通俗日本全史』第11巻(早稲田大学出版部, 1912年) 176頁。
 - 19) 『厭蝕太平楽記』の引用は『近世実録翻刻集』(高橋圭一・山本卓編, 2013年) 所収の藤沢毅翻刻に拠る。なお、広島経済大学図書館所蔵本(30巻15冊本)を適宜確認したが表記に異動はあるものの内容に大きな違いは認められなかった。
 - 20) 注11) 藤沢毅論文。
 - 21) 注11) 藤沢毅論文。
 - 22) 注13) 久堀裕朗論文。他の実録諸本にはなく『厭蝕太平楽記』のみにみられる四つの要素として、①片桐且元の軍師招集、②後藤又兵衛と国松、③千姫救出、④「(天下の)客分」という言葉、の四点に着目し、それらが『近江源氏先陣館』『太平頭整飾』の内容と対応していることを明らかにしている。
 - 23) 『近江源氏先陣館』の引用は日本古典全書、『近江源氏太平頭整飾』の引用については日本古典文学大系52『浄瑠璃集 下』所収『鎌倉三代記』に拠った。
 - 24) 帝国文庫『紀海音・並木宗輔浄瑠璃集』(博文館, 1929年) 200頁。